

洋の東西を自在に涉猟した、膨大にして繊細なる知の楳円軌道の集大成

〈書評〉

洋の東西を自在に涉猟した、膨大にして繊細なる知の楳円軌道の集大成

Sukehiro Hirakawa, *Japan's Love-Hate Relationship with the West*, Global Oriental, 2004, 557pp.

稲賀 繁 美

はじめに

本書を開くと、巻頭には十八世紀中国の詩句が掲げられている。

この三十年、衣服は流行に連れて忙しく伸び縮みした。でも自分は流行を追わず古式を守ってきた。ふとあたりを見回すと、古びた服だのどうやらそれが最新流行となった様子。いささか自嘲を込めた清の詩人、袁枚（一七一六―一九七）の言葉をアーサー・ウェイリーが英訳したもの。著者、平川祐弘氏はそこに自らの心境を照らし、学匠詩人としての信念を確かめたようだ。

著者待望の英文による初の単著は、ここ三十年に亘る英文によるエッセイを集約した大著となって出現した。三十代半ばでダンテの『神曲』を新鮮な現代日本口語に訳出した著者は、詩魂におけるナシヨナリズムを古今集と西欧ルネサンスの詩との交響に説き起こす

かたわら、江戸後期から現代におよぶ日本と海外との文化交渉を中心に、膨大な研練を積んできた。その概要は、五五七頁の紙幅をもつてしても、なお覆い尽せない。著者が欧米での復権に尽力した、小泉八雲ことラフカディオ・ハーンについては、同じ出版社から別に一冊の英文著作の刊行が予定されている。日本語では上中下の三冊本のある利瑪竇に関しては、既に中文・韓文訳が知られているが、本書では西洋文学における恋と東アジア文学に於ける友情とを対比した章で、簡略に一箇所登場する(436)のみで、索引にも拾われていない。また明治期に福沢諭吉と並ぶ存在だった中村正直については、西洋文学の最初の翻訳を論じた章で扱われているが、これには近く別途に日本語による単著が用意されているという。

収録されたなかで最も古いのは「黄禍と白禍」(一九六九・初出はフランス語だが、既にここに著者の節操の一貫性と自在な論理構築力が窺える。著者は語る。第二次世界大戦における日本の役割を、現在から遡って正当化するとすると、同様の論法で西欧列強によるアジア植民地化も正当化することになるだろう。日本が東南アジアの独立を助けたというのなら、西欧列強は東南アジアにナシヨナリズムの意識を植え付けたといえるからだ(238 cf. 327)。この論文の冒頭には、欧米の黄禍論が日本での白禍論の生みの親となったとするアナトール・フランス(一八四四—一九二四)の見解が引かれる。敗戦直後の占領下で、柳田國男はこの説を和辻哲郎に伝えた。それが和辻をして日露戦争をも侵略戦争の一環として罪悪視する占領史観から脱却せしめる一助となった。この経緯を描き出す著者の筆法は鮮やかだが、ここにはマルクス主義と米占領軍の施策とが奇妙な癒着を遂げた結果生れ落ちた侵略史観(311・330)に対する、著者の半世紀一貫した疑念も表明されている。

本書のラッパには日露戦争時の日本海軍旗艦、三笠が英国ヴィッカース社の船台を離れ、公式試運転に臨んだ折の勇姿が取られている。だがその当時を知る軍人たちが退役し、装備も純「日本製」になると日本軍は国際的視野を失った。そう著者は観察する(122)。

身をもってこの変質を体験したのが『曠野の花』の石光真清(236・索引なし)だろう。自らを「日本製」の学者と自称して憚らぬ著者は、だからこそ海外の流行(コミンテルン・テーゼ(266)であれ、連合軍性善説であれ(31))に盲目的には追従せず、森鷗外流の「二本足」(542・3)を重視する。文化比較の三点測量を体現した人々が、著者の賞賛の対象となる(317)。例えば三笠を英国から日本へ廻航したなかには、山梨勝之進(一八七七一—一九六七)が居る。一九三〇年のロンドン軍縮条約調印に尽力し、ために予備役に回されたこの海軍大將は、敗戦処理に悴尽する米内光政海軍大臣に、白居易の詩「野火烧ケドモ尽キズ」を手向けて力づけ(20)、敗戦後には、禅と俳句の研究者、R・H・ブライス(一八九八一—一九六四)とともに、天皇・裕仁の「人間宣言」発布への道筋を背後から準備したことが解明される(312 sq.)。

著者の多くの発見も、本書にふんだんにちりばめられている。漱石と師マードック先生との関係からは、漱石の「現代日本の開花」がマードックの著作への批判的対案だった可能性が導かれる(269)。小泉八雲の「或る保守主義者」のモデルとしては、雨森信成(200・索引なし)の事績が明るみにだされ、エジンバラ大学を卒業した清朝遺臣・辜鴻銘(一八五四—一九二八)との対比が提案される。対比列伝は著者の十八番だが、英語で読むならフランクリンの自伝が、日本語で読むなら福沢諭吉の福翁自伝が面白い、という原典主義も

主張される(18)。森鷗外の現実の家庭環境と創作との関係を探った一篇も見事だが、夏目漱石(二八六七—一九一六)の「クレイグ先生」を模範に魯迅(二八八一—一九三六)が「藤野先生」を描きあげた経緯では、著者の人物描写の筆致にも堪能させられる。著者がその著作集を編んだ岳父・竹山道雄(二九〇三—一八四)に關しても、「ビルマの豎琴」(二九四八)の水島上等兵に、伝道師アルベルト・シュヴァイツァーの面影の投影をみる斬新な仮説が提案される(348)。

だが、ランパレネの博愛主義者も、近年ではその現地人蔑視の価値観が批判されるにいたっている。竹山の場合にも、シャム国境近くの少数民族の記述にかんして、ビルマ出身のカリフォルニア在住者からの抗議があり、原著者が七十年代に部族名を抹消する修正を施した事実にも言及される(347)。人権意識に名を借りた糾弾を、筆者は虚構の権利への侵害と捉えているようだ。しかし虚構を理由に作品を免責しようとする論法では、今日の人権意識の高まりに対処するには、役不足だろう。たしかに金春流の演目に限られた「初雪」をわざわざ取り上げたウェイリー訳が、原作の鶏を純粋な白鳥という抽象的な美に昇華した手腕は、文学作品の翻訳ならではの手柄というべきだろう(430)。そうしたウェイリーの手際を解明する著者の鮮やかな分析に接して、作品生成の「化学」研究(349)の意義を認めるに吝かではない。だがそれは、あくまで虚構存立の倫理問題とは別次元の事柄だ。

二.

このように本書は、隠された事実発掘と、それをひとつひとつ丹念な手作りの史料操作によって組み立てる積み木細工のような論文構築力においては、他の追従を許さぬ妙技を見せる。だが、歴史的判断や著者の価値判断の次元では、論争含みの性格をくつきりと顕著にする。第五部の「文化間を交差する解明の試み」では、ウェイリーの示唆を手がかりに「神曲」と謡曲との類比が探られる(39)。具体的な影響関係の認められない文学作品同士の対比研究は忌避される場合が多い。だがここで著者はW・B・イェイツが謡曲から感化を得て「煉獄」という戯曲を書いた事実を扇の要として出発する。一連の探求は、一方では「神曲」の登場人物としてのダンテのヴェルギリウスへの依存を、土居健郎の「甘え」の概念によって解剖を施す試みへ、他方では福岡女学院大学の学生との授業を通じて、ダンテにおける「嫉妬する神」の熾烈な姿を再認識し、「聖書」共同訳がこれを「熱情の神」と改竄する選択を下したことへの批判(40)へと、著者を導く。さらにブレヒトが謡曲「谷行」のウェイリー訳に触発された戯曲「同意する人」「同意しない人」をめぐる議論。はたして集団(党)の目的遂行の障害となる個人は、排除されるべきか否か、その個人に自己犠牲への同意を強要できるか否か、が問われていた。著者は犠牲の強要こそが掟の非情さを印象付け、作品の劇

的な効果を保障するものと分析し、旋に「否」と答えた場合を描いたプレヒトの改作(劇団員の要請による)には難色を示す。この著者の見解は、一九八八年にミュンヘンの国際比較文学会で発表されて以来、国際的にも論争を巻き起こした。プレヒト評価の根幹にかかわるその批判的検討・総括は、続く研究者の課題だろう。

この議論を含む第五部は、比較文学の方法論をめぐる実践的な検討を提供する。イソップの寓話「蟻と蟬」が日本での翻訳において温情的な解釈に置換された、という話題は、日本国内では一九七七年の発表当時から話題になった。だがヨリ興味深いのは、日本のフランス文学者にはラフォンテーヌの専門家がおらず、日本の古典研究者にはイソップの専門家が居ないため、両者の比較研究が進まなかった(372)、とする著者の認識だろう。専門家集団の閉じた問題意識に風穴を穿つことが、比較文学研究者の務めとなる所以だろうか。これと対をなす「西洋の愛、東洋の友情」は、全編のなかで唯一既出の記載がないが、一九一八年版の中国詩訳詩集にウェイリーが付けた序文に触発された文化類型論の体裁をとる。だがその結論は類型論の枠を破り、漱石の「こころ」の名訳との誉れたかいマクラレン訳が、小説の勘所を誤訳している実態に迫る。「先生」は、自殺を決意して認めた遺書の手紙に、自分の「妻が己の過去について持つ記憶」を汚されることのないように、との配慮を示す。「己」は妻自身を指すはずだが、この部分が英訳では「妻の私に関する記

憶」と誤訳されている(41)。漱石の原文に見えるのは、Kと先生とのふたりの秘密に妻を立ち入らせまいとする冷酷な隔離措置だった。これに対し、マクラレン訳では先生と妻との関係の保護が優先されている。翻訳者は、もっぱら夫婦の愛情を問題にする西欧小説の流儀に無意識に引きずられたようだ。そのため、Kと先生との友情の濃密さを描く漱石の原文の意図が、翻訳者の想定からは抜け落ちた。問題は単なる誤訳の指摘ではない。文化の定型がいかに翻訳における解釈に働きかけ、規範や定型から逸脱した解釈を検閲するか。その生熊が、翻訳の検討から見えてくる、とするのが著者の見解だ。

さらにこうした規範同士の衝突を正面から分析するだけでなく、方法論として実践したのが、川端康成の『山の音』解釈だろう。この長編力作には、北米在住の日本出身研究者への敵愾心も明白だ。川端の作品は建築的というよりも流動的で、論理の飛躍も少なくないと見る、論敵のマサオ・ミヨシ(508)や、著者の盟友で「論理志向」のキンヤ・ツルタ(95)の説に対して著者は異を唱え、小説の筋としてのプロットとは別の次元に、登場人物と自然との交感によって生まれる「もののあはれ」の水準が存在し、そこに辿られる心理的な論理性を *conductor* として読むことを提唱する(これも、北米の学会でフランス語の混入が有効なことを熟知し、またカナダでの発表であることに配慮した著者の戦術)。自然が登場人物に及ぼす感応を読者も感知できるなら、この「もののあはれ」の感覚に

頼ったほうが、仔細な説明よりも、はるかに雄弁で詩的にも効果的だ(509)、そこには「連歌」的連辞(49)とでもいうべき結構がある、と言うわけだ。

言外の「ものあはれ」のほうが「仔細な指摘」よりも効果的である。そのことを説明するために、筆者は仔細な弁舌を駆使している。そこに皮肉な倒錯を認めるのは、しかし筋違いだろう。むしろ日本語を母語として育った読者には不必要な説明を、敢えて英語という外国語によって言語化することで、あらたな地平が開けてくる。そこに著者は知的な喜びを見出している。なお『山の音』には向日葵に男性原理を見る解釈が現れるが、これは川端の発案というより、あるいは伊藤整も紹介に努めていたD・H・ロレンス經由の太陽志向の隠喩ではあるまいか。その英語通の伊藤整も、北米での講演では勝手が違い不如意だったという。日本的なるものを外国でも通用する論理に鍛え上げる訓練があまりに不足している(538)。その苛立ちが、著者をして外国での発表へと駆り立てている。

実際、外国における日本文学の受容や日本研究の現状に関する報告は、近年質量ともに充実してきている。だが外国での成果を日本語に翻訳して伝達したのでは、例えばマクラレン訳で発生しているような、翻訳をつうじた解釈の異同や取り違いは、原典からの引用に復元・置換されることで、却って解消され、蒸発して見過ごされてしまう。反対に外国の文学・文献の日本語への翻訳は、明治期か

ら高度経済成長期にいたる百年間ほどの切迫性は失いながらも、なお量的減衰には至らぬ傾向を示している。だがその反面、そうした成果は、水の流れに浮かぶ泡沫よろしく消費されては消え行くのみ。はたしてそれがいかに日本で反芻・消化され、海外への発信へと用立てられているかには、国内市場の内部に閉鎖した日本の文科系の学術・出版界では、ほとんど注意が払われることもない。巨大な国内市場と海外市場とが存在しながら、情報の流通は一方から他方への直流が大半で、両者を往還する交流の回路には、細い通路しか確保されず、橋渡しの媒介項は、学者の人的交流の面でも、情報の流通機構上でも、きわめて未成熟なままに取り残されている。

さらに具体的な翻訳の現場に眼を移してみよう。翻訳をするならば外国語から母語へという原則は、著者がウエイリーから汲んだ教訓だ。しかし同時に原語と翻訳との異同を吟味することに関しては、翻訳先の言語を母語とする者には限界がある。マクラレン氏にも、ご自分で自分の誤訳を発見することはむづかしかったことだろう。翻訳結果の検証には、原語を母語として翻訳先の言語も理解できる者による、交差した点検を加味したほうが確実だろう。翻訳の名人が発信に長けているとは限らず、逆に発信に長けたものが確実な翻訳能力を発揮するとは限らない。そうした中で、著者は頭と尾の双方に機関車のついた稀有な人材のひとりといってよいが、その「ヘラクレス的」な能力を備えた著者にして、英国の出版社からの英語

著作の公刊に漕ぎ着けたのは、漸く七十代半ばである。

三.

その著者が理想としたのは、細部の事実を大切にするジョージ・サンソム(二八八三—一九六五)の血の通った文体であり(278・542)、単なる「文獻／博言学者」(542)の域に留まることをよしとはしなかったウェイリーの「単純にして詩的」な文体(40)だった。全編を通読してその資質が一番すなおに吐露されているのは「森鷗外の母に対する愛憎関係」であろうか。Have something to do with, conspicuous, instrumentalといった単語の頻出がやや目障りだが、要所所には気の利いた単語が輝き、日本語での執筆と同様の歯切れのよい文体と、読ませる構成は心憎い。また著者の北米での初舞台ともいえる一九七八年のライシャワー元大使の講演へのコメントは、著者一流の皮肉が見事に決まっいて抱腹絶倒のうえ、一言ひとことが腑に落ちる(54)。北米での口頭試問の模範例といえよう。

問題は、はたしてここに引かれた膨大な固有名詞、多数の中国人や韓国人を含む人名をきちんと漢字表記に戻すだけの学識を備えた読者が、世界中にどれだけ居るかとの疑問だろう。人名表記に関する真面目な冗談とも見える冒頭注記ひとつとっても、おそらく英国の出版社との交渉には様々な紆余曲折があったものと推定できる。その舞台裏も、異文化摩擦の好個の例として、別途公表を期待した

い。以下は出版社への注文となるが、索引の項目取捨選択の法則性が把握し難いこと(本書評で言及した固有名詞にも、索引非採録が少なくない。また「鷗外」と「漱石」の例外措置には、MoriとNatsumeの項にも一言配列箇所の指示が欲しい)。またフランス語やドイツ語の表記に単純な不備が散見する(例えば207・521など)といった瑕疵は、増刷の際にご配慮賜りたい。そしてこれは読者に向けられた著者からの宿題と見るべきかもしれないが、できるならば索引に漢字人名が併記されたならば、本書の活用価値は、大きく増大することだろう。この膨大にして緻密な著作を前にして山上憶良が Yamano no Okura(437: 索引なし)となっているなど、九牛の一毛に過ぎない。

狭義の文学史や文化史の枠を大きく越えて、法制史から憲政史、外交史から国際関係論といった広大な隣接領域にも踏み込む学術的著作は、専門分化の進む日本ではもはや今後刊行不可能だろう。もとより六百頁足らずの紙幅にすべてを圧縮するのは無理な相談だ。論争を呼ぶ幾多の指摘のみならず、例えば一例に過ぎないが、矢野龍溪の『佳人の奇遇』の梁啓超による中国訳(4)が追ってヴェトナム語に韻文訳され、越南国民文学の嚆矢となった経緯など、さらに展開すべき文化交流史の話題の源が、本書には無数といつてよいほどに集積され、封印されている。著者が十七年前に執筆に参画した

Cambridge History of Japan, vol.5(一九八九)は一九九八年に
Modern Japanese Thought (ed. Bob Wakabayashi)として再刊さ

れ、同年秋、書評者がコロンビア大学に客員研究員として赴任した折には、East Asian Languages and Culturesの教科書に指定されていた。同様に本書を出発点とした学術的議論が洋の東西に亘る刺激伝播を生むこと切望して、刊行を寿ぎ、書評の結語に代えたい。

*

著者が「日曜日世紀」の一詩人と名づけた、鍾愛の袁牧には「君莫笑楼高」に始まる、友との交りを謳う詩がある(434)。その高樓を、著者は渋谷区西原の自宅書齋に喩え「定年教授の楽しみ」なる自詩へと翻案したことがある。巻を閉じると、臉には遙かに浮かぶ光景がある。週末の薄暮に高樓の窓から眼下を見やると、そこには洋の東西より高雅の士が現れる。それは著者との清談を求めて、遠方より徒歩で訪れる来客たちの姿である。

二〇〇六年四月一二日

〔付記〕 本書に関しては、その後毀誉褒貶の落差も激しい書評が何編か公表されるに至っているが、本稿はそうした論争含みの状況が発生する以前に執筆されたものであることをお断りする。論争に関する評者としての見解は、機会があれば、別途改めて公表したい。

二〇〇六年八月八日付記